論　説

ロバート・ウォーレスとデイヴィド・ヒューム
――スコットランド啓蒙における古代近代論争*

天　羽　康　夫

はじめに

「どうして世界は昔とくらべて非常に人口が少なくなったのか。どうして自然は初期の驚異的な多産性を喪失することがありえたのか。自然はすでに，老年期にあり，衰弱死するのであろうか。」[1]「地球上にはカエサルの時代にそこにいた人間の50分の１しかいない。それについて驚くべきことは，地球は日々に人口を減少していて，これが続くとすると，いまから10世紀後には地表から人の影が消えうせることだ。」[2]『ペルシャ人の手紙』におけるモンテスキューの悲観的な観察は，1707年のイングランドとの合邦後，激しい政治的混乱と深刻な経済的危機を克服する手がかりを摸索しつつあったスコットランドの知識人たちの目にとまった。ジャコバイトの最後の蜂起（1745年）の少し前，スコットランド教会の牧師，ロバート・ウォーレスがエディンバラ哲学協会で，モンテスキューの言葉に言及し，近代になり人口が減少しつつある，近代の人口よりも古代の人口のほうがはるかに多かった，という趣旨の報告をした。ウォーレスの報告原稿は数奇な運命をたどることになる。それは，哲学協会会長モー

高知論叢（社会科学）第73号　2002年３月

* 本稿は社会思想史学会第25回大会（東洋大学2000年10月）での自由論題報告「スコットランド啓蒙における古代近代論争」をもとにしたものであるが，かなりの加筆を行っている。大会報告にたいして貴重なコメントをしてくださった方々に感謝したい。

[1] Montesquieu, *Persian Letters,* Penguin Classics, 1973, p. 202. モンテスキュー（根岸国孝訳）『ペルシャ人の手紙』筑摩書房（世界文学大系16）103頁。

[2] *Ibid.,* pp. 203-4. 邦訳，104頁。「カエサルの時代…の50分の１」は1758年よりまえの版のもので，1758年版で「古代…の10分の１」に変更された。*Ibid.,* p. 326.

トン卿に提出されたのだが，モートン卿は1746年にその原稿を携えて渡仏する。後にウォーレスと論争することになるデイヴィド・ヒュームも同行していたセント・クレア将軍のロリアン攻撃戦の最中にモートン卿は，ロリアンに滞在していて，しかもそのとき彼のパスポートの期限が切れていたために逮捕され，バスティーユに3ヶ月間収監された。1746年末モートン卿は釈放され，その翌年の5月にイングランドに帰り，それからその原稿が，ウォーレスの手に戻ったのである[3]。ドーヴァー海峡を往復したウォーレスの「人口についての論稿，エディンバラ哲学協会で報告された最初の草稿」（以下では「人口論草稿」と略記）は，現在，エディンバラ大学図書館に所蔵されている[4]。

1751年の夏ウォーレスは，「人口論草稿」あるいはそれに手を加えたものをデイヴィド・ヒュームに見せ，ヒュームの意見を求めた。その頃ヒュームもウォーレスと同様に人口問題についての論稿を書きつつあった。そこでヒュームもウォーレスに自分の原稿を読む機会を与えた。ふたつの人口論のうち先に出版されたのはヒュームのものであった。すなわちそれは，1752年1月に公刊された『政治論集』のなかに「古代諸国民の人口について」[5]（以下では「古代諸国民論」と略記）というタイトルで収められたのである。「古代諸国民論」におけるヒュームの主張は，ウォーレスと真っ向から対立する。古代よりも近代のほうがはるかに人口が多いというのだ。そして「古代諸国民論」は「現在を貶め過去を称賛するという気質は，人間本性に根強く植え込まれていて，最も深遠な判断力と最も該博な学識とを兼ね備えている人びとにすら影響をおよぼしている」（PAN, 464, 237）という言葉で締めくくられる。

---

[3] Ernest Campbell Mossner, *The life of David Hume,* Thomas Nelson & Sons Ltd, 1954, (OUP, 1970), pp. 262-3.

[4] Dissertation on the numbers of mankind. The first draft as read to the Philosophical Society, Edinburgh. Lord Morton's copy with the Bastille mark, Edinburgh University Library, La.II.96（3）. 以下ではEDと略記。

[5] David Hume, *Political discourses,* Edinburgh, 1752, X, Of the populousness of antient nations. デイヴィド・ヒューム（田中敏弘訳）『政治経済論集』御茶の水書房，1983年。以下ではPANと略記し，ミラー版 *Essays moral, political, and literary,* ed. by Eugene F. Miller, revised edition, Liberty Classicsの頁数と邦訳の頁数を示す。尚，訳文は一部変更している。

「古代諸国民論」に刺激され，またその著者に励まされウォーレスは，ヒュームに見せた原稿に手を加え，1753年2月に『古代と近代における人口についての一論説』[6]（以下では『古代と近代の人口』と略記）として出版した。『古代と近代の人口』は，その本文で「人口論草稿」における古代優位論をより詳細に展開し，後半にヒューム批判の「附録 —— 同じ主題についての追加的考察およびヒューム氏『政治論集』の「古代諸国民の人口」についての若干の論評」（以下では「附録」と略記）がつけられている。「附録」といっても168頁もあり，本文より8頁ながい。その「附録」のなかでウォーレスは「過去を貶め現在を称賛するという気質は，人間本性に根強く植え込まれていて，最も深遠な判断力と最も該博な学識とを兼ね備えている人びとにすら影響をおよぼしている」（*DN*, 266-7）とやり返す。こうしてヒュームとウォーレスの論争が始まった[7]。

欧米ではこれまでこの論争は主としてマルサス前史のなかで取り上げられてきた[8]。しかしヒュームとウォーレスの論争は狭く人口の多寡の問題に限定されたものではない。ヒュームはいう。「一般に，さまざまな時代や王国の人口比較の問題は，そこから重要な結論をもたらすものであり，それによって，通

---

[6] [Robert Wallace], *A dissertation on the numbers of mankind in antient and modern times: in which the superior populousness of antiquity is maintained. With an appendix, containing additional observations on the same subject, and some remarks on Mr. Hume's Political Discourse* 〔sic〕, *Of the populousness of antient nations*, Edinburgh, 1753. (Thoemmes Reprints, 1992) 以下では *DN* と略記。

[7] 論争の経過については Mossner, *op.cit.*, pp. 262-8 ; do., *The forgotten Hume*, New York: Columbia University Press, 1943, (Thoemmes Reprint, 1990), chap. 5 ; 田中敏弘『社会科学者としてのヒューム』未来社1971年132-9頁を見よ。

[8] C. E. Stangeland, *Pre-Malthusian doctrines of population: A study in the history of economic theory*, New York: Columbia University Press, 1904. (Kelley Reprint 1966); J. Bonar, *Theories of population from Raleigh to Arthur Young*, London: George Allen, 1931. (New impression, London: Frank Cass, 1966); D.V. Glass, *Numbering the people: The eighteenth-century population controversy and the development of census and vital statistics in Britain*, London: Gordon & Cremonesi, 1978 and J.M. Hartwick, Robert Wallace and Malthus and the ratios, *History of political economy* vol. 20, no. 3, 1988, pp. 357-379.

常，さまざまな時代ないし王国の治政全体や風習や統治構造の優劣が決まるのである。」（PAN, 381, 142-3）ヒュームと同様にウォーレスもこの問題を単なる好奇心の問題ではなく重要な問題と考えていた[9]。彼等はともに古代と近代の人口の比較は，古代社会と近代社会の，古代文明と近代文明の優劣の問題と考えていたのだ。モスナーがいうように当時の人口論争は「デモグラフィーを乗り越え，二つの文明，古代ギリシャ・ローマ文明と文芸復興以来のヨーロッパ文明の総体的評価」[10] をめぐる論争だったのであり，それ故，スコットランド啓蒙における古代近代論争とみなすことが出来る。わが国の研究はこの点を見逃さなかった。永井義雄と田中敏弘は，人口論争の背後に，近代社会と古代社会に対するウォーレスとヒュームの見方の対立があるということを看取していた。そしてこの論争を経済思想史あるいは社会思想史の観点から取り上げ，両者の経済社会認識の相違を明らかにした[11]。しかしこれまでの研究では，ヒューム「古代諸国民論」は，ウォーレス『古代と近代の人口』の本文に対する批判で，それに対するウォーレスの反批判が『古代と近代の人口』につけられた「附録」だと想定されていた。すなわちヒュームとウォーレスの論争は，『古代と近代の人口』（1753年）→「古代諸国民論」（1752年）→「附録」（1753年）と

---

[9] 後出，317頁をみよ。

[10] E. C. Mossner, Hume and the ancient-modern controversy, 1725-1752: A study in creative scepticism, *University of Texas Studies in English,* vol. 28 1948, pp. 139-153.

[11] 永井義雄『イギリス急進主義の研究－空想的社会主義の成立』御茶の水書房1962年第1章，田中敏弘，前掲書，第6, 7章。ウォーレスとヒュームの論争は人口論に限られたものではなく，宗教論から経済論にもおよび，近年，ウォーレスについて新しい視角からの関心が高まりつつある。坂本達哉はウォーレスを，名誉革命体制を巡るヒューム，ブラウンとの論争のなかで取り上げ（『ヒュームの文明社会』創文社1995年第6章），また，我国におけるウォーレス研究の先駆者である永井義雄は，スコットランド・ナショナル・ライブラリーとエディンバラ大学図書館に所蔵されているウォーレスの小冊子と手稿の整理を踏まえて新しいウォーレス像を提示しつつある（『自由と調和を求めて』ミネルヴァ書房2001年第7章）。海外の新しいウォーレス研究としては以下のようなものがある。N. Smith, Robert Wallace's Of venery, *Texas Studies in Literature and Language,* vol. 15, no. 3, 1973; do., Sexual mores in the eighteenth century: Robert Wallace's Of Venery, *Journal of the History of Ideas,* vol. 39, no. 3, 1978; R.B. Luehrs, Population and utopia in the thought of Robert Wallace, *Eighteenth-century Studies,* vol. 20, no. 3, 1987.

いう順序で考察されてきたのである。欧米の研究でもこの順序で考察されている。だが,「附録」だけでなく『古代と近代の人口』の本文もヒュームの「古代諸国民論」の後に出版されたものである。このような順序で考察されたのは,1751年の夏にウォーレスがヒュームに見せた原稿が『古代と近代の人口』の本文と安易に同一視されたためである。しかしヒュームの「古代諸国民論」を読んだウォーレスが,その刊行以前にヒュームに見せた原稿をそのままの形で印刷に回したとは考えられない[12]。それにもかかわらずこのように同一視されたのは『古代と近代の人口』刊行以前のウォーレスの所説を知る手掛かりがなかったためである。「人口論草稿」の存在についてはヒュームの書簡集や伝記の中で早くから言及されている[13]。また,我国では永井義雄が「人口論草稿」をふくむエディンバラ大学所蔵のウォーレス文書についての詳細な報告をしている[14]。しかし「人口論草稿」の分析はまだなされていない。ウォーレス自身は『古代と近代の人口』のまえがきで,本書はエディンバラ哲学協会に提出した原稿を――ほんの少しささいな加筆をしたが――そのままの形で刊行したものであると述べている。だが『古代と近代の人口』の本文は,「人口論草稿」の約4倍の長さがある。

1751年の夏にウォーレスがヒュームに原稿を見せた段階で「人口論草稿」にどの程度の加筆がなされていたかを確定することはできない[15]。そこで本稿で

---

[12] ウォーレスは『古代と近代の人口』仕上げの段階でエディンバラ大学の市民法教授マッケンジーと歴史学教授マッキーに助言を求めている。さらにヒュームにも校正刷りを見せ再び意見を求めている。これらのことはヒュームの「古代諸国民論」刊行後,ウォーレスが1751年の夏にヒュームに見せた原稿にさらに手を加えたことを示している。Cf. Mossner, *The life of David Hume*, pp. 265-6 ; do., *The foregotten Hume*, pp.114-117.

[13] Raymond Klibansky and Ernest C. Mossner, *New Letters of David Hume*, Oxford, 1954, p. 29; Mossner, *The life of David Hume*, p. 263.

[14] 永井義雄「イギリス思想史の資料から――草稿の所在を中心に」『社会思想史研究』第4号1980年。同『自由と調和を求めて』前掲,179頁,注10によればエディンバラ大学図書館には「人口論草稿」以外に『古代と近代の人口』の準備的ノートと校正刷りが所蔵されている。しかし本稿では利用できなかった。

[15] モスナーはウォーレスが「人口論草稿」に手を加えて学術的な論稿に仕上げたものをヒュームに見せたといっている(Mossner, *The life of David Hume*, p.263)が,ヒュームは,エディンバラの牧師(ウォーレス)が何年か前に書いた論説を最近わ ↗

はウォーレスとヒュームの論争を資料の年代順に検討する。まず「人口論草稿」を検討する。次にヒュームの「古代諸国民論」を取り上げる。「古代諸国民論」は，ヒュームがウォーレスの原稿を見た頃にはすでに完成段階にあり，そこにはウォーレスの影響は少ないと言われている[16]。しかし内容的には以下でみるようにウォーレスを意識して書いていると思われる部分がかなりある。最後にウォーレス『古代と近代の人口』の本文を取り上げ，ヒュームの「古代諸国民論」を読んだウォーレスの思想の展開を検討する。「附録」におけるヒューム批判の検討は今後の課題としたい。

第1節　ウォーレス「人口論草稿」

文芸復興以来多くの学識者が世界のさまざまな時代の歴史を研究し，古代の生活様式と慣習についての多くの興味深く有益な情報を提供してきた。だがそれにふさわしい取り扱いを受けていないひとつの主題が残っている。それはさまざまな国の人口とその推移である。そこでウォーレスは，「この主題は興味深く有益なので，それについて報告するのはこの学識ある協会にとって不愉快なことではないであろう」（ED, 1）と語りかける。

たしかに過ぎ去った時代の正確な人口を知ることは困難である。しかし「ヨーロッパ，アジア，アフリカのよくしられているほとんどの国において現在，また，何年も前から古代よりも住民がはるかに少なくなっている」（ED, 2）ここでウォーレスはヴォッシウスに言及する。ヴォッシウスも多くの地域で古代には現在よりもはるかに多くの人間がいたと主張している。しかし彼が当時のヨーロッパの人口を，3000万人を上回らないとしているのは過小評価である。概して彼は古代と中国贔屓のようにみえる。冒頭でみたモンテスキューの『ペルシャ人の手紙』の一節にも注目する。しかしカエサルの時代の人口を現在の50倍だというのは過大評価である。すなわちウォーレスは，現在の人口につい

↘ たくしに見せてくれたと述べている（PAN, 638-9, 140）。ヒュームの言葉によればウォーレスがヒュームに見せたのは「人口論草稿」だったかもしれない。

[16] 坂本達哉，前掲書，173頁以下。

てのヴォッシウスの過小評価と過去の人口についてのモンテスキューの過大評価を批判するのである。

だが古代の人口の優位という点では，ウォーレスは，ヴォッシウスやモンテスキューと同じである。ウォーレスにとっては，ヴォッシウスとモンテスキューが十分な根拠を挙げずに古代の優位を述べていることが問題であった。さらに「これまでこの問題（古代の人口――引用者）に光をあてる古代の著述家達の章句を集めた人はだれもいない。」（ED, 3）そこで古代の諸文献から古代諸国民の人口を推定することがウォーレスの課題となる。彼が利用した文献は，聖書およびホメロス『イリアス』，ヘロドトス『歴史』，カエサル『ガリア戦記』，ディオドロス・シクロス『歴史叢書』，ストラボン『地誌学』，タキトゥス『ゲルマニア』，リウィウス『ローマ史』，アテナイオス『賢者の宴席』といったギリシャ・ローマの古典である。これらの文献に挙げられている数字を根拠にしてニネヴェ，バビロン，エジプトのテーベの大きな人口について報告する。とくに武器携帯可能な市民あるいは自由人の数が人口推定の大きな手掛かりとなる。ハリーの法則[17]を適用してその約4倍がその国の奴隷を除いた全住民の数だというのである。この法則はハリーが当時のシレジアの一都市の統計から導出したものであるが，ウォーレスは，アダム・スミスのように社会の発展とともに総人口と兵士の比率が変化するとは考えずに[18]，ハリーの計算が，カエサル『ガリア戦記』とストラボン『地誌学』で挙げられている兵士数と全住民数

---

[17] Cf. E. Halley, *Two papers on the degrees of mortality of mankind,* ed. by Lowell J. Reed, The Johns Hopkins Press, 1942, p.7. ただしハリーは全戦士の4倍が全住民だというが，奴隷をのぞいた数とはいっていない。

[18] 「戦争に行くことができる人の，国民総数にたいする割合は，粗野な状態の社会よりも文明化した状態の社会のほうが，必然的に，はるかに小さい。… 古代ギリシャの小農業国では，国民全体の4分の1ないし5分の1が，自分を兵士と考えていて，ときにはそのように出陣しただろうといわれている。近代ヨーロッパの文明諸国民のあいだでは，兵役の費用を支払うどの国でも，破滅することなく兵士として使用できるのは，住民の100分の1までだと一般に考えられている。」Adam Smith, *An inquiry into the wealth of nations,* 1776, Glasgow edition, vol. 2, pp. 695-6. スミス（水田洋訳）『国富論』岩波文庫第3巻351-2頁。

の比率にほぼ合致することから[19]，それをそのまま古代に適用した。ウォーレスが人口推計に利用したもうひとつの資料はテンプルマン『地球の概観』[20]である。そこで挙げられている諸地域の面積の比較から人口が推定される。たとえば，面積が全体の10分の1である都市の人口が10万人だということが分かれば，その国の全人口は，地域による人口密度の違いを考慮に入れずに，単純に面積比から，その都市の人口の10倍すなわち100万人であると算出するのである。こうした手法で古代のギリシャ，イタリア，エジプト，パレスチナ，ガリア等の人口が算出される。ウォーレスの人口推計，とくに古典の数値への全面的依拠は後にみるようにヒュームに厳しく批判されることになるが，以下において古代のギリシャ，イタリアおよびガリアの人口についてのウォーレスの推定をみておこう。

ギリシャは非常に小さく，テンプルマンによれば，エピルス，マケドニア，アルバニアを含めてもイングランドより小さい。これら3地域は古代にはギリシャの一部とみなされていなかった。これらをのぞくとギリシャの面積はイングランドの3分の1にもならない。しかし古代ギリシャには，人口稠密な多くの都市と国家があった。アテナイオスによれば[21]デメトリウス・ファレレウスの時代（紀元前4世紀頃）のアテネに21,000人の市民と10,000人の外国人がいた。ウォーレスは，市民だけでなく外国人をも武器携帯可能な者とみなして，ハリーの法則からその4倍，124,000人をアテネの住人数と計算する。この数にアテナイオスが挙げている奴隷400,000人を加えて，この時代のアテネの人口は524,000人となる。ではギリシャ全体の人口はどうか。ウォーレスはアテ

---

[19] ED, pp. 7-8. Cf. Caesar, *Gallic Wars,* Loeb classical library, pp. 44-5．カエサル（近山金次訳）『ガリア戦記』岩波文庫，49頁；Strabo, *Geography,* Loeb classical library, vol. 2, pp. 278-281.

[20] Thomas Templeman, *A new survey of the globe; or an accurate mensuration of all the empires, kingdoms,... and islands in the world... with notes explanatory and political, wherein the number of people in all ye principal countries and cities of Europe are severally calculated, etc.*, London, 1729. ここでは一橋大学のゴールドスミス文庫にある1776年版を参照した。

[21] Cf. Athenaeus, *The Deipnosophists,* Loeb classical library, vol.3, pp. 222-3. 後に見るようにヒュームはアテナイオスが挙げている数字，とくに奴隷の数はまったく信用できないという。

ネの人口をギリシャの全人口の20分の1もないと推定しても大きな誤りではないという。面積がイングランドの3分の1もないギリシャにアテネの人口の20倍，すなわち約1000万の人間がいたのである。

イタリアにもローマ帝国成立以前には多くの富裕な強国があった。ローマについては，建国約200年後，セルウィウス・トゥリウスの時代の市民は80,000人であったというリウィウスの一節が根拠になる[22]。ここでもウォーレスはハリーの法則を適用し，市民の約4倍すなわち320,000人がローマの全自由人と推定される。当時ローマの人口は急速に増大しつつあった。ローマ建国500年ごろには市民は300,000人，したがって全自由人は1,200,000人となる。さらにウォーレスはディオドロス・シクロスとストラボンを典拠にイタリア南部のシュバリスとクロトンの繁栄に言及する。前者は30万人の，後者は10万人の軍隊を戦場に送りだした。戦場に送り出された者以外に武器携帯可能な者がいなかったと想定しても，両国の自由人は，これらの4倍で，150万人以上になる。しかもここで挙げた数には，奴隷はふくまれていない。古代には奴隷が非常に多かった。その数を確定するのは容易でない。ここでウォーレスはアテネの自由人と奴隷についての先に見たアテナイオスの一節に注目する。それによれば自由人（124,000人）と奴隷（400,000人）の比は約3対10である。それを適用すれば上述の自由人の数の3倍以上の奴隷がいたことになる。そこでウォーレスはつぎのように報告する。「ローマ帝国成立以前のイタリアは，非常に人口が多かった。イタリアは世界を征服することによって人口の点では得るところよりも失うところが大きかった。ローマは実に強国であった。だが，その偉大さが，他の諸都市にもたらした破壊を相殺するものであったかどうかは疑わしい。」（ED, 10）

ガリアについては『ガリア戦記』が典拠となる。ローマとの戦争でベルギウムの諸地方から徴集された兵員数としてカエサルが述べている308,000人が基礎数となる。この数は，武器をとりうる人の全てではない。ベロウァキ族は，10万人の兵力があったのに6万人しか送り出さなかったというカエサルの叙述

---

[22] Cf. Livy, *Livy*, Loeb classical library, vol. 1, pp. 154-5.

に注目し，10対6という比率を全体に適用し，武器携帯可能な人数が515,000人と算出される[23]。ハリーの法則によりこの4倍，206万人がベルギウムの全自由人となる。これに奴隷が加わる。奴隷の数はここでも上述のアテネにおける比率から算出される。すなわち奴隷は，自由人の3倍，618万人で，自由人と奴隷を合計したベルギウムの全人口は，824万人となる[24]。

以上のようにして推定された古代の人口がヨーロッパで最も人口の多いイングランドの人口，約800万人[25]と比較される。古代ギリシャには1000万人もいた。また「古代ベルギウムは現在のネザーランドよりもはるかに広く，現在のフランスの一部さらに他の地域を含んでいた。しかし800万人以上という上述の計算からすれば，ベルギウムは，現在人口が非常に稠密な連合7州をも含めたこれらの国々と同じほど人口が多かったという結論にたっする。」(ED, 18) こうしてウォーレスは，世界の人口は，現在よりも昔のほうがはるかに多かった，イタリア，ギリシャ，エジプトおよびその他の国々の人口は，現在のイングランドの3倍あるいは4倍もあったと報告する。

では近代における人口減少の原因はなにか。その原因として自然的なものと社会的(モラル)なものが考えられる。しかし大気の変化とか太陽熱の低下があったとは思われない。人口減の原因は自然的なものよりも社会的なものである。ウォーレスは以下の9項目を列挙する。①イスラム教のもとでの多妻制と宦官制度。②ローマ・カトリック諸国における，非常に多くの独身の修道士修道女の存在。③貧民の境遇が古代と近代で異なること。④古代ギリシャ・ローマには存在しなかった長子相続制。⑤古代においては既婚者が尊敬され多くの特権をもっていたが，近代では結婚に特権はともなわず，また，奢侈の風潮のもとで，十分な富をもたずに結婚をするのは軽率だと考えられていること。⑥東西インドとの貿易。⑦古代の軍隊と異なり近代ヨーロッパの常備軍には非常に多くの独身

---

[23] 正確には308,000 × $\frac{10}{6}$ で約513,000となる。尚，ここでウォーレスはカエサルが挙げているアドゥアトゥキの兵員数19,000人を，29,000人と読みちがえている。この点は『古代と近代の人口』で訂正される。Cf. Caesar, *The Gallic War,* Loeb classical library, pp. 94-7. 邦訳，77-8頁。

[24] 草稿 (ED, 18) では854万人となっており，ウォーレスの計算間違いだと思われる。

[25] ED, p. 19. Cf. Templeman, *op.cit.*, plate 5.

兵士が存在していること。⑧古代と近代の統治制度の相違。⑨近代における農業の軽視と交易の重視。ウォーレスは，特定の国あるいは特定の時代にかかわることを思いつくままに列挙しているようにみえるが，これらは，直接結婚にかかわるもの①②⑤⑦と，政治経済的背景③④⑥⑧⑨とに大別される。前者については説明を要しないであろう。以下では④⑧を＜古代と近代の政治＞と，また⑥⑨を＜古代と近代の経済＞とまとめて，ウォーレスが指摘している政治経済的背景を（1）古代と近代の貧民の状態（2）古代と近代の政治（3）古代と近代の経済の順で見ていこう。

1　古代と近代の貧民の状態。

近年のヨーロッパには膨大な数の乞食と貧民が存在している。フレッチャーによればスコットランドの住民は150万人であり，そのうち10万人が乞食である[26]。さらに乞食ではないが貧困に苦しめられている膨大な数の小作人，下級小作人，下層の職人が存在する。彼等は，結婚することができず，結婚したとしても子供を養育することができない。古代にはそれほど多くの乞食はいなかった。また，古代の貧民の境遇は近代と異なっていた。人々は貧しくなると，奴隷となった。奴隷制は人口増の妨げにはならなかった。奴隷所有者は，彼の財産である奴隷の結婚を奨励し，奴隷の子供を大切に育てた。古代の奴隷の境遇は想像されがちなほどみじめなものではなかった。「一般に奴隷は，今日の乞食よりも，さらに今日の非常に多くの小作人，下級小作人，下層の職人よりも容易に生計の資を得ていたし，またはるかに大切に養われていたようである。」(ED,24)

2　古代と近代の政治。

アレクサンドロスの時代以前，それ以後でもローマ帝国の成立に至るまでヨーロッパは何百もの，おそらく数千もの独立した小国に分かれていた。その多くは共和国であり，古代共和国は人口にとって好ましい状況にあった。そこには

---

[26] ED, pp. 22-3. フレッチャーによれば物乞いの数は20万人である。Cf. Andrew Fletcher, *Political works,* ed. by John Robertson, Cambridge University Press 1997, p. 67.

長子相続制がなく，息子達の全てが等分の財産を相続し，土地を耕し，結婚し，家族を養うことができた。「小さな領地はよく耕され，各国がその土地を最大限に利用していた。」(ED, 28) 古代ギリシャ・ローマにはなかった長子相続制が導入されると長男以外の子供は，財産を相続できず結婚することができない。裕福な人々の子供のなかで長男だけが家庭をもち，未婚の従者を使用している。また，現在のヨーロッパでは国の数は減少し，おそらく50にも達しないであろう。国が大きくなると首都の近辺はよく耕されているが，そこから遠く離れたところは放置されることになる。「ロンドンから50マイル以内のところは庭園のようであるが，ブリテンのへき地は同じ利益を享受していない。」(ED, 28) フレッチャーが提案するようにブリテンが10ないし12の領域に分割されるならば，ブリテンの人口は現在よりも多くなるであろう[27]。

3　古代と近代の経済。

東西インド，とくに西インドとの貿易は，多くの人々を遠く離れ風土の異なったところに送り出し，ヨーロッパにおける人口減の原因となった。「どの国も自国の土地を耕し，近隣諸国と通商することによってより多くの人々を養うことが出来る。」(ED, 27) 最も広い意味での土地の耕作が交易の基礎なのである。それが製造業と貿易のための物資を提供する。オランダのように国土を十分に改良せずに中継貿易によって豊かになり，人口が増大している国もある。しかしこの商業(トレイド)の企画は，世界全体には適さない。人々は大地の産物と動物によってのみ生きていくことができる。もしあるところで農業がおろそかにされると，その分だけ人口が少なくなる。同様のことは，大きな領土をもつひとつの国についてもいえる。「大きな領土をもつ国が，その国土の大部分を放置し，多くのものが中継貿易のために沿岸の都市に集まるとしよう。この方法でも人口が増えるかもしれない。しかし，中継貿易のみに従事している人手を農業にむけ，国土のあらゆる部分を改良し，そして人々を移住させる方が，人口は早

---

[27] Cf. Fletcher, *op. cit.*, pp. 210-211. フレッチャーの分割論については田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究』名古屋大学出版会1991年38頁以下を見よ。

く増加するであろうし，そしてあらゆる種類のより大きな交易の基礎が築かれることになるであろう。」（ED, 30-31）国土が改良されつくしてしまうまでは，いかなる国においても中継貿易は人口を増大させるための適切な方法ではない。さらに近代においては農業が軽視され，上層階層は農業のことを考えていない。それは無知で貧しい人々の手に委ねられている。これらの点で古代は近代よりも有利な状況にあった。古代の交易は，近代よりもより狭い範囲のものであった。また古代においては農業が尊重され，土地改良の能力をもつ富裕な土地所有者が彼等自身の監督のもとで奴隷を使用して，彼等の土地を耕作していたのである。

このように近代における人口減の政治的経済的背景をみたウォーレスは，「人口論草稿」の末尾（ED, 34-37）で以下のような9項目[28]の改善策を提案する。改善策といっても最初の6項目は，ある国の人口をが多いか少ないかを測る基準と，その基準から見たブリテンの現状分析である。ブリテンといってもウォーレスの関心は，主として，スコットランドにむけられている。

（1）耕作に容易に耐えうる限度まで耕されていない土地が多く残っている国は，十分な人口を擁しているとはいえない。また，国産の穀物や果実や家畜が国内で消費されずに輸出されるのは，その国の人口が少ないからである。国産の穀物や家畜を消費するに十分な人口を擁している国が最も強い。また国産の食料を輸出するよりも，製造品を輸出するほうが望ましい。そして世界のすべての国が，扶養可能な人口を擁するようになるまでは，世界全体として十分な人口を擁しているとはいえない。ここでウォーレスはマルサスを想起させるような注をつけている。「地球全体がこのように完全に開拓されてしまうと多くの人間が，不作と飢饉のときには滅んでしまうに違いない。」（ED, 34）しかしウォーレスは楽観的である。そのように地球が開拓され尽くすのは，先のことで心配をする必要はないというのだ。

---

[28] モスナーは草稿を誤読して7項目といっている。Cf. Mossner, *The life of David Hume*, p. 263.

（2）ブリテンには大きな未開拓地があり，また，膨大な穀物が輸出されているから，十分な人間が住んでいるとはいえない。すでに見たようにウォーレスはスコットランドに多くの貧民が存在し，彼等は十分な生活手段を得ることができないために，結婚もできず，また，結婚しても子供を養育できない状態にあるということを知っていた。しかしウォーレスはここではそのことを無視して，国内で消費する人間が不足しているために余剰産物が輸出されているというのである。

（3）ブリテンの人口が少ないひとつの原因は，富裕な家庭の息子達が財産を求めて海外に流出しているからであり，たとえ国内にいても彼等は，彼等の受けた教育にふさわしい生活を維持できないと思い結婚をしない。そのために多くの未婚婦人が存在する。

（4）さらに自分の仕事で容易に生活できるのに，自分の死後の妻子の生活を危惧して結婚しない人が多数いる。

（5）ブリテンの国土が十分に開拓されていないのは，貧しい小作人によって耕作されていることおよび借地期間が短いこと以外に，富裕層が農業を軽視し，息子達を軍人，商人，技術職，あるいはなんらかの知的仕事向けに教育しているからでもある。

（6）このように富裕層が農業を軽視しているのは，すでに述べたように国内で消費可能な量以上の穀物や家畜があるので，土地を耕作する刺激がないからだと思われる。しかしヨーロッパの現状をみれば，我々の穀物を輸出して大きな利益をあげることができる。

ウォーレスは以上のような分析を踏まえてつぎのような改革案を提示する。

（7）土地財産を所有するジェントルマンおよびその他の資産家にとって，彼等の息子達を上述の仕事ではなく農業に向くように教育するほうがはるかに有利である。

（8）スコットランドの非常に多くの地域で，1エーカーあたり3シリング以下，あるいはわずか2シリングで土地を耕作させている。息子にイギリス正貨1000ポンド与えることのできるジェントルマンが息子をイングランドの農業者につけて育てるか，あるいは家庭で広義の農業の知識を教え，農業への嗜好

を身につけさせればよい。農業ほど快適な仕事はない。さらに農業によって大きな利益をあげることが出来る。借地期間が2,3世代あるいは非常に長期になれば1エーカーあたり2シリングの土地を2000エーカーあるいはそれ以上借りて，1000ポンドあるいはそれ以下の改良費で，現在の収穫の2ないし3倍，あるいは4倍の収穫を得ることが出来るであろう。

（9）働いている男性達が，彼等の死後の妻子の生活を保障するために，大きな協会をひとつあるいは小さな協会をいくつか設立する。その会員は生存中，彼等の死後残された妻子に払込に応じた額が支給されるという条件で，毎年一定額の金額を積み立てる。このようにすれば（4）でみたような死後の妻子の生活を危惧して結婚しない人が少なくなるであろう[29]。

第2節　ヒューム「古代諸国民論」

ヒュームもウォーレスと同様に「古代諸国民論」の最初の部分でヴォッシウスとモンテスキューに言及する。ヒュームは，彼等の主張にたいして懐疑的である。現在のヨーロッパのどの国の人口あるいはどの都市の人口すら正確に分からないのに，不完全な記録しか残っていない古代の国家あるいは都市の人口をどうして知ることができるのか。そこでヒュームは「古代諸国民論」を，ウォーレスとは逆に人口推計からではなく，人口を規定する要因の研究からはじめる。ウォーレスとは叙述の順序が逆転する。ここにスコットランド啓蒙における推測的歴史の始まりを看取することができる。人口そのものを確定できないので，まず，それを規定する要因を解明しようとするのである。ヒュームもウォーレスと同様に人口を規定するものとして自然的原因よりも社会的（モラル）原因を重視する。ヒュームはそれを家政的（ドメスティック）状況と政治的状況に分けて考察しているが，前者は古代奴隷制にかかわり，後者は古代と近代の政治と経済を含んでいるから，ヒュームの展開はウォーレスの展開とほぼ対応している。しかし結論は正反対である。

---

[29] 「人口論草稿」を報告した頃ウォーレスはスコットランド教会の大会議長として「牧師未亡人基金」創設の為に尽力していた。

1　古代奴隷制

ウォーレスが近代の貧民の状態よりもましだと擁護した古代奴隷制をヒュームは痛烈に告発する。「古代の熱情的な賛美者と，市民的自由の熱狂的な支持者とには…現在この制度（奴隷制度 ── 引用者）が存在しないのがどうしても残念だという人もいる。だから彼等は，ただ一人の支配する政府への服従には全て奴隷制という厳しい烙印を押しながら，他方では人類の大半の部分を喜んで実際の奴隷制と隷従状態とに陥れることになるであろう。この問題を冷静に考察する人には，人類（ヒューマン・ネイチャー）は一般に，ヨーロッパの最も専制的な政府のもとでさえ現代のほうが，古代の最も繁栄した時期よりも多くの自由を実際に享受しているということが明らかであろう。」（PAN, 383, 144）奴隷所有者は，奴隷は自分の財産であるからその増殖を願い，その子供の養育につとめるという見方にたいして，ヒュームは，首府や大都市近辺では養育費が高いので，都市では，牛が飼育されないのと同様に奴隷の子供も養育されないであろうと反論する。都市で奴隷が養育されないので，物価の安い地方から奴隷が購入されることになる。都市では人口が増えず，人口希薄な地方からは都市に人口が流出し，全体として人口は減少する。イタリアにはシリア，小アジア，エジプト等々から多くの奴隷が不断に流入したにもかかわらずイタリアの人口は増えなかった。

2　古代と近代の政治

ローマ帝国成立以前の古代の独立小共和国についてはヒュームも，ウォーレスと同様に賛辞をおくっている。小共和国では「財産の著しい平等がいきわたり，また政治の中心はいつもその辺境のごく近くにあった。／…人類の増殖にとってこれほど有利な制度はありえない。というのは，過大な財産を所有する人は，他の人よりも多く消費することはできないので，彼に仕えかしずく人びとにそれを分かち与えざるをえないけれども，しかし，彼等の財産は不安定であるから，彼等は，各人が少額でも確実で独立した財産を持つ場合と同じほど結婚にたいする奨励を感じないからである。その上，巨大な都市は，社会にとっ

て破壊的であって，あらゆる種類の悪徳と騒動とを生み出し，遠く離れた地方を飢えさせ，それどころか，すべての食料の価格を騰貴させて，自らをも餓死させる。各人が自分のための小さい家と畑とをもち，各州が自由で独立した首都をもつところでは，人類の状態はなんと幸福なものであろうか！それは産業と農業にとり，結婚と増殖にとり，なんと有利なものであろうか！もし貧困と窮乏とが人びとの生殖力に課しているあの抑制がなくなり，生殖力が十分に作用したならば，それは人口を世代ごとに倍加させるであろう。そして，このような小共和国と，市民のあいだにおける財産のこのような平等ほど，生殖力に自由を与えるもののないということは確実である。」（PAN, 401, 164）さらにヒュームは「財産の平等だけでなく市民的自由に関しても，近代の事態のほうが人類の増殖にもその幸福にも非常に有利だとは言えそうにもない」（PAN, 402, 166）と付け加える。

しかしこの賛辞には「もし貧困と窮乏とが人びとの生殖力に課しているあの抑制がなくなり」という限定がつけられている。さらに独立小共和国には上述の利点を相殺して余りある大きな不利益があった。まず古代諸共和国は「その好戦的精神，自由の愛好，相互の競争心，近隣諸国民間に広くいきわたっているあの憎悪」（PAN, 404,168）のために絶えず戦争状態にあった。国全体が前線となり敵の侵略にさらされ，全住民が軍務につく小国家間の戦争は，大国間の戦争よりもはるかに破壊的になる。

古代の兵士は，最低階層より身分の高い自由市民であり全て結婚していたのにたいして，近代のわが国の兵士は，下層民からなり，結婚していないか，結婚しても人口増には寄与していない。「このことは，古代を優位にするある程度重要なこととして，考慮に入れられるべき事情である」（PAN, 405, 168）と，ヒュームは，注で，ウォーレスに譲歩する[30]。しかし古代の兵士は略奪行為にふけり，そのために古代の戦争の原理は，近代のそれよりもはるかに破壊的であった。他方，現代の卑しいわが国の兵士は，給料をもらい，少しでも豊

---

[30] すでに見たようにウォーレスは「人口論草稿」で，近代の常備軍に独身兵士が多いことを近代における人口減のひとつの原因とみていた。

かになると軍規を乱し，大騒ぎをする。そのために近代の侵略は古代よりも破壊的でなくなっている。さらにヒュームは，戦闘に使用される武器，戦闘の仕方から古代と近代を比較する。「古代の戦闘は，それに使用された武器の性質そのもののため，はるかに血生臭いものであった。…全軍が交戦し，各人がその敵兵と接近して格闘したので，戦闘は，普通，極めて血生臭いものであり，双方の側に，ことに敗北した側に大量の殺りくが加えられた。近代の戦闘は，火器の出現で必要となった，あの横に長く奥行きの浅い戦闘線と，争いのあのすばやい決着とのために，単に部分的な遭遇戦となり，戦闘のはじめに破れた将軍がその軍隊の大部分を無傷でそのままの姿で撤退させることができるようになっている。」（PAN, 405, 168-9）近代における火器の導入が戦闘における犠牲を少なくしたというのだ[31]。

さらに古代共和国は国内で，絶えず激しい党派争いをしていた。「自由な統治から党派争いを排除することは，全く実行できないことではないにしても，極めて困難である。しかし党派間のこのような執念深い敵愾心と，このような血生臭い原理とは，近代では宗派間にしか見出されないものである。古代史においては，貴族であろうが庶民であろうが…ひとつの党派が支配的となった場合，彼等は，その手に捕らえた反対党の者を全て即座に惨殺し，幸いにも彼等の敵愾心をまぬがれた者はこれを追放した。」（PAN, 407, 171）さらに古代の政治原理によれば財産は非常に不安定であった。貨幣が欲しくなればいつでも財産を没収するために，豊かな外国人だけでなく豊かな市民をも，殺すというのがアテネの民衆のやり方であったというリュシアスの言葉が引用される[32]。また，ウォーレスが高く評価した財産の均等相続制をヒュームは，古代国家を不安定にした要因であったとみる[33]。こうしてヒュームは「一般に，古代の政

---

[31] スミスもヒュームと違った意味であるが火器の発明の意義を認めていた。火器の発明が，その軍事力により，それを持つ文明国を野蛮国にたいして有利にするというのだ。「火器の発明は，一見したところでは極めて有害なもののように見えるけれども，文明の永続にとっても拡大にとっても，確実に有利なものである。」Smith, *op.cit.*, vol.2, p. 708. 邦訳第3巻，373頁。

[32] PAN, p. 411. 邦訳，176-7頁。

[33] Ibid., p. 413. 邦訳，178頁.

治原理には人間性と温和さはほとんどない」(PAN,414, 180) という。それに対してスィフトに揶揄されているが「イングランドの統治は，人間性と正義と自由との点で近代においても注目にあたいするものなのである」(PAN, 414, 180)

3　古代と近代の経済

「交易や製造業や産業が，現在のヨーロッパほど繁栄しているところは以前にはどこにもなかった。」(PAN, 416, 182) 古代アテネは商業都市といわれているが，その商業はとるにたりないものであった。当時の高い利子と大きな利潤は，商業が揺籃期にあったことを示している。農業は生存に必要な産業であり，その為に製造業が未発達なところでも栄えるかもしれない。しかし大きな国で長期にわたって農業がそれだけで存続することは難しい。農業を奨励する最も自然な方法は，他の種類の産業を興し，耕作者に彼の生産物にたいする市場を提供し，見返りに彼の快楽をみたす物品を与えることである。これが古代よりも近代の統治のもとでより広くいきわたっている方法なのである。ヒュームは，このことから近代の人口の優位を推定することが出来るとして，さらに次のようにつづける。「最近の我々の改善と洗練は全て，人間生活を容易にし，その結果，人間の増殖と増加になんの貢献もしなかったであろうか。機械的技術における我々の優越，商業を飛躍的に拡大させた新世界の発見，郵便制度の確立，為替手形の使用，これらは全て技術と産業と人口にたいする極めて有効な刺激になると思われる。」(PAN, 420, 186-7)

以上のように古代奴隷制，古代と近代の政治と経済についてみたヒュームは，世界の人口が古代のほうが近代よりも多かったと推定する正当な根拠はないという。しかし事実に反する推論は存在しないとして，ヒュームも，古代の人口の算定にはいっていく。しかしヒュームはウォーレスと対照的に古代の諸文献にたいして極めて懐疑的である。「古代の著述家達によって述べられている事実は，極めて不確実であるかあるいは極めて不完全であるために，我々にこの問題についてなんら決定的なものを提供してくれない。…著名な著作家達によっ

てなされた算定の根拠の多くは，ローマ市の大きさを推計するために皇帝ヘリオガバルスが利用したものよりもましなものではない。彼はローマ市内で発見された蜘蛛の巣の重さが1万ポンドだったということからローマの大きさを算定したのである。」（PAN, 421, 188）とくに古代の写本で挙げられている数字は信用できない。それは原本の他の部分よりも誤記されやすい。しかも他の個所の誤記には，前後の意味とか文法から容易に気付くが，数字の誤記は見逃されがちである。ウォーレスがしばしば利用しているディオドロス・シクロスは優れた著作家であるが不正確だとして，シュバリスとクロトンの人口についてウォーレスが引用している個所を全く信用できないという[34]。またウォーレスが言及しているニネヴェ，バビロン，エジプトのテーベの大きな人口は，真実の歴史の外にあるとして取上げない[35]。ヒュームはギリシャ，ローマ，ガリアとそれらの周辺に限定して人口推定に入っていく。

ギリシャについてヒュームはウォーレスが根拠とした21,000人の市民と10,000人の外国人と400,000人の奴隷というアテナイオスの一節の批判的検討からはじめる。これらの数字は信用できない，奴隷の数は少なくともゼロひとつだけまるまる増やされているとして10項目の反証を列挙する[36]。さらにアテナイオスは，アテネの住民だけでなく近隣都市の住民も数えている。古代の文献で市民の数が挙げられる場合，その都市だけでなく近隣諸地域の住民が含まれているので注意しなければならない。ウォーレスの推定をこのように批判したヒューム自身は，初版の本文ではギリシャの総人口の推定を行わなかった。注でマケドニアのフィリッポスがペルシャ遠征に動員したギリシャの兵力が230,000人であったという近代のフランス人の叙述を根拠に，自由人の数を920,000人，奴隷を青年男子市民の数の2倍つまり460,000人として総人口を138万人と計算

---

[34] PAN, p. 422. 邦訳，189頁.

[35] PAN, p. 426. 邦訳，195頁.

[36] Ibid. pp. 427-431. 邦訳，196-201頁。ジョン・ミラーは，アテナイオスが奴隷の数をひと桁間違えているというヒュームの所説を批判し，ヒュームのように奴隷の数を4万人とする根拠はないという。John Millar, *The origin of the distinction of ranks,* 1779 in William C. Lehmann, *John Millar of Glasgow,* Cambridge University Press, p. 316.この点は学会報告のさいに田中秀夫氏より示唆された。

している[37]。ウォーレスはすでにみたように1000万人と算定していた。

古代イタリアとローマの人口の優位についての近代の所説にもヒュームは非常に懐疑的である。古代の著作家達の断片的な章句から得られる全ての手掛かりを集めたとしても「この問題についてなんらかの見解を確定することは極めて困難であり，したがって，近代の著作家達によってあれほど主張されているあの誇張された計算を支持しなければならない理由は少しもない。」(PAN, 437, 208) ローマの人口を1400万人としたヴォッシウスの算定は，大プリニウスの章句を読み違えている。また市民に対する奴隷の比率は重要な問題であるが，最も不確定な問題である。すでにみたようにウォーレスはアテネの比率をローマに適用した。だが「アテネをもってローマを測る尺度とすることができるかどうかは極めて疑わしい」(PAN, 442, 213)。古代の文献によれば当時のイタリアには未耕地が多く，耕作の状態もわるかった。このことから古代の人口の優位ではなく，逆に，古代の人口が現在よりもはるかに少なかったということが推定される。「世界のこの部分が現在よりも多くの住民をもちえたのではないかと想像しうる時期を，かりにわたくしが決めるとすれば，わたくしはトラヤヌスとアントニヌス三帝の時代を選ぶであろう。なぜならその当時，ローマ帝国の大部分が文明開花され，国内も国外も穏やかな平和のうちにほぼ安定しており，同一の規律ある治政と統治のもとに生活していたからである。」(PAN, 457-8, 230-1) ウォーレスがローマの人口衰退が始まると見た帝政ローマ成立後が，ヒュームによれば，ローマが文明化され現在よりも多くの住民がいた時期なのである。巨大な国家は人口増にとって破壊的であり，ローマ帝国についても有望そうな外観のうちに隠れた悪徳と害毒がひそんでいたといわれている。しかし「巨大な君主国がしばしばいわれているほど破壊的だと考える理由はない。」(PAN, 461, 233)

ガリアのベルギウムの人口推定については，ヒュームはウォーレスから数字

---

[37] PAN, p. 642. 邦訳，206-7 頁。ウォーレス『古代と近代の人口』出版後に刊行された第3版（1754年）以降本文で，ユスティヌスを典拠にギリシャの人口は129万人と推定されることになる。

を少し修正して借用したという[38]。ヒュームも『ガリア戦記』を利用する。ベルギウムで徴集された兵力208,000人に，カエサルの叙述にあるベロウァキ族の武器携帯可能な人数と実際に徴集された人数の比，すなわち10対6を適用して，ベルギウムの全戦士の数を50万以上と算定する。そして全住民は200万人と推計される。ここまではウォーレスとほぼ同じである。住民数は全戦士の4倍と計算されている。すでにみたようにウォーレスは，この数に奴隷，約600万人を加えて，ベルギウムの全人口を約800万人と算定していた。しかしヒュームは奴隷の数を加えていない。注でカエサルを典拠にしてガリア人は家内奴隷をもたなかったという。現在のポーランドのように人民全体が貴族の奴隷であり，武器携帯可能な全てが戦争に徴集された。そこでウォーレスが奴隷を加えて約800万人とみたベルギウムの全人口は，ヒュームによれば上述の200万人となる。そしてその4倍の面積をもつガリア全体の人口は約800万人と推計される。古代ガリア人が，生活の技術において北方の隣人よりも進歩していたとは思われないし，当時のガリアに現在のフランスと同じほどの人口がいたと考えることもできない。800万人というのは，現在のこの地域の住人の3分の1にもならないとヒュームはいう。

このように「古代諸国民論」の後半は，たしかにいくつかの地域については古代の人口の推計をしているが，古代の人口数そのものの推定というよりも，むしろ古代の諸文献に全面的に依拠したウォーレスの人口推計にたいする批判であった。しかしヒュームが古代と近代の人口比較を放棄していたわけではない。次のように述べて，近代の優位を説くのである。「中心をドーヴァーかカレーにとって，半径200マイルの円を描いてみよ。そうすれば，ロンドン，パリ，ネザーランド，連合7州およびフランスとイングランドの最もよく耕作された諸地方のいくつかがその円の中に入ってしまう。ところで，この円と同面

---

[38] Ibid., p. 639. 邦訳，140頁。ウォーレスへの謝辞を含む『政治論集』初版と2版につけられていたこの注は第3版で別の注に変更された。そこでもヒュームはウォーレスに言及していたが，その注は，ウォーレスが死ぬ前年に出された1770年版で削除された。ヒューム自身は「古代諸国民論」とウォーレス『古代と近代の人口』との関係に言及しなくなったのである。田中敏弘，前掲書，138頁。

積で，これとほぼ同数の巨大で人口の稠密な諸都市を含み，またこれと同じほどの富と住民とをたくわえたような場所は，古代にはけっして見つけることはできないと安心して断言できる。」(PAN, 448, 219-20)

この断言の背後には，奴隷制にもとづく古代共和国にたいする近代社会の優越についてのさきにみたような認識があったのである。

第3節　ウォーレス『古代と近代の人口』

ウォーレスは『古代と近代の人口』の導入部で人口の増殖法則を展開する。これは「人口論草稿」には見られなかったもので，マルサスの先駆として注目されている[39]。

人類は地上のいたるところで一挙に出現したのではない。最初の1組の男女から徐々に増殖してきた。ウォーレスは次のような想定で人口がどのように増加していくかを推計する。33年と3分の1年を1期間すなわち1世代とする。その間に1組の男女から，男3人女3人計6人の子供が生まれ，そのうち男1人と女1人は結婚するまえに死亡し，残ったものは成長し，全て結婚する。以後各世代が同じことを繰り返す。この想定にもとづけば，人類の誕生から33年と3分の1年後には最初の1組の男女と，彼等の子供のうち成長した次世代の2組の男女，計6人の人間が地上にいることになる。66年と3分の2年後には，最初の1組の男女はすでに死んでいて，地上にいるのは，彼等の次世代の2組の男女と，この2組の男女から生まれた男6人女6人のうち成長した4組の男女とで，計12人となる。人類は約33年毎に倍増する[40]。このことが繰り返されると人類は幾何級数的に増加していく。この想定でウォーレスは人口表を作成する[41]。それによれば最初の1組の男女から333年後には3,072人，666年後には3,145,728人，そして1200年後には約2000億人になる。大洪水以前に地球は人口

---

[39] Cf. Hartwick, Robert Wallace and Malthus and the ratios.

[40] マルサスはこの期間を25年とする。ウォーレスには食料は算術級数的にしか増加しないという認識はない。

[41] *DN*, p. 7.

過剰になっていたことになる。そこでこの増殖法則は事実と経験に反するという。

しかしウォーレスはこの増殖法則を無用なものとは考えなかった。この表は最初の1組の男女から，何世代かをへた時期に実際に生存している人間の数ではなく，一定の想定のもとで何世代目かに相当する子孫の人数を示す。そしてその数は，人類の増殖がさまざまな原因によっていかに妨げられてきたかを知るのに役立つというのだ[42]。そのことを明らかにするために，ウォーレスは「人口論草稿」でも典拠としていた『地球の概観』を利用して，当時の人口の概数を次のように推定する。もし人間が生存可能な地上のすべての地域に，イングランドと同じ密度で住んでいるとすれば世界の人口は49億6千万人以上になる。しかし全体としてイングランドと同じ密度で住んでいるとは考えられない。そこでスコットランド，オランダ，ロシアを基準とした計算をしたうえで，ウォーレスは，全体としてはスペインと同じ程度の密度だとして，当時の全世界の人口を10億人を超えないと推定した。上で見た想定のもとでの増殖法則によれば，最初の男女から966年，第29世代目の人間は約16億1千万人である。大洪水のかなり以前に現在よりもはるかに多くの人間がいたことになる。大洪水後アレクサンドロスの時代までに約2000年が，また，ペルシャ帝国の創始者キュロスの時代までに約1800年が経過している。先の増殖法則によれば，あるいはより低い増殖法則を想定したとしても，大洪水以後はノアの3人の息子とその妻すなわち3組の男女から出発したので人口の増加は，大洪水以前より早い。したがってより短期間で現在の人口を凌駕していたことになる。

人口の増殖法則，テンプルマンを根拠とした当時のヨーロッパの人口推計，さらに聖史に依拠した年代区分からこのように古代の人口の優位を見たウォーレスは，人口に影響を与える要因の考察にむかう。自然的原因よりも社会的（モラル）原因が重視される。この認識は「人口論草稿」にすでにあったが，『古代と近代の人口』ではより明確になる。自然的原因が破滅的な影響を与えたこともある。しかし「人々の熟練と勤勉によって，また有益な法律と制度によって，ある程

---

[42] *Ibid.*, p. 9, note.

度，おそらくかなりな程度まで，それを阻止出来るであろう」（*DN*, 12）というのだ。『古代と近代の人口』では人間的社会的要素が「人口論草稿」よりもより積極的に評価されるようになってきた。そこで人口の大小は，単なる好奇心の問題ではない。それは，「人間社会の最も深遠な政策と最も本質的な構造とに緊密に関わっている」（*DN*, 14）極めて重要な問題なのである。しかしこの問題は闇の中につつまれている。古代の著作家たちの説明は極めて不完全だ。古代の諸文献を最大の注意をもって調べたとしても「特定の時代あるいは特定の国の人口の増加率または減少率と，その変化の特定の原因とについて正確に確定することはおそらく不可能であろう。」（*DN*, 14）

こうして『古代と近代の人口』ではウォーレスもヒュームと同様に，人口の多寡を古代と近代の優劣を測る指標と捉えるようになった。それと同時に古代の文献について懐疑的になってきた。そこで『古代と近代の人口』では「人口論草稿」とは叙述の順序が逆転する。「人口論草稿」ではウォーレスは，まず古代の文献を資料にして古代の諸地域の人口を算定し，そのあとで人口衰退の原因を考察していた。『古代と近代の人口』では人口推定にはいるまえに「より個別的な比較をするさいに導きとなる，自然と恒常的な観察とから引き出された一般的原理」（*DN*, 15）が提示されることになる。

第1に，各国の人口はその国が産出する食料に比例する。そこで農業，商業，工業（アーツ）がなく，漁猟と大地の自生的産物で生活をしている未開野蛮な国民は，農業に熟達し，商業によって文明化された国民よりも人口が少ない。ウォーレスは商業と工業（アーツ）による文明化を高く評価するようになってきたかのようである。

第2に，すべての国の気候と土壌がひとしく人口の増殖に有利なわけではない。不毛な土地よりも温和で豊かな風土が増殖に有利である。

第3に，各国の人口は土地分割制度に大きく左右される。小さな土地を均等に配分する制度は，人口にとって有利である。古代諸国民とくにローマは長い間この制度のもとで多くの人口を擁していた。この見方は「人口論草稿」にもあった。しかし『古代と近代の人口』では大きな不平等のもとでも「技術が奨励され，土地で働く人びとを維持する分を超える部分が技術と科学の開発にむけられるならば」（*DN*, 17）多くの人が住むようになるであろうという。さら

にヒュームの『政治論集』に触発されたかのように産業の意義に注目する。「土地が極めて不平等に分割され，そして土地を耕作している人々以上に多くの人を養うことができるところでは，優雅なものが追究され，その為の技術に適切な刺激が与えられなければ，その国の人口は希薄になるにちがいない。／…いかなる国においても，どんな種類のものであれ産業がいきわたり，その生産物が国の内外において販売されうるならば，その国は人口が多くなり，商工業（アート・アンド・コマース）によって繁栄することになろう。たとえ農業が十分に奨励されず，またいくらかの土地がかなり放置されているとしても繁栄するであろう。産業と商業の力はまさに，遠くから食料品を購入し，その国の土地の生産物が維持しうるよりも多くの住民を維持するところにあるのだ。」（*DN*, 17-18）しかしウォーレスは次のような限定を加える。世界全体としてみれば，いかなる国の土地であれ，未耕地があれば，地上の人口はその分だけ少なくなる。したがって産業と商業の力に対する評価は余剰農産物のある特定の国にのみ適用されることになる。さらにこの評価は後にみるように徐々に後退していく。

第4に，結婚奨励政策は人口に有利である。これとの関連で国民の生活様式が重視されることになる。奢侈がいきわたり，官能と情欲に耽っている国民の人口は減少する。それらがいきわたると多くのものが結婚しなくなり，また，家族の維持が困難になるからである。質素な生活が良俗とみなされ，人口に有利だといわれる。奢侈批判は『古代と近代の人口』の重要な論点となる。

第5に，人類の生存は大地の産物と魚肉類によってのみ維持されるから，人口を殖やすには，農業と漁猟が尊重されなければならない。「世界の人口を最大にするには，すべての人が，直接，食料の供給に従事すべきである。このことは，地上の全てが完全に開拓され尽くしてしまうまでは，いつもあてはまる。」（*DN*, 21）「産業と商業の力」を指摘した第3の原理の末尾でも同様のことがいわれていた。しかしここで「産業と商業の力」はさらに限定がつけられることになる。第3の原理のところで引用した主張そのものに疑問が投げかけられる。製造業が広がってくると，農業から多くの人手がそちらに向けられ，質素な生活がなくなり，多くの品物が求められるようになり，その結果生計費が高価になり，大多数の国民にとって生計を維持するのが困難になるというのだ。

しかしウォーレスが全ての製造業を否定的に見ていたわけではない。食料供給に必要な技術のなかに，直接食料生産にかかわるものだけでなく，その為の道具類さらに衣類や家屋および「働く人の健康と力を維持するのに役立つもの全て」（*DN*, 20）に関係するものまでも含めているのである[43]。こうした「必要のための技術」が広がるにつれて人口は増え，「装飾のための技術」が広がるにつれて人口は少なくなるというのがウォーレスの第5の原理であった。また，農業を起点として，それに関連した技術が徐々に発展していくというのが「ものごとの自然の順序」であった。「農業が進歩するにつれて，他の技術も同様に進歩するであろう。最も必要な物が最初に改良され，そのあとで必要度の低いものすなわち必要よりも洗練のためのものが続く。…さまざまな種類の技術と製造業が農業とともに日々発見され，改良されることがないとは考えられない。」（*DN*, 30-31）ここでウォーレスは，スミスと同様に製造業に対する農業の先行を見ているようである[44]。しかし結論は逆になる。スミスが農業から製造業への発展の中に富裕の自然の進歩を見たのにたいして，ウォーレスは，「奢侈が広がるにつれて，人口の増大はゆるやかになり，やがて人口は減少し始めるであろう」（*DN*, 31）というのだ。

以上のような一般的原理を提示した後，ウォーレスは古代と近代の人口比較に着手する。『古代と近代の人口』ではすでにみたようにウォーレスは古代の諸文献の数字に懐疑的になっていた。しかし『古代と近代の人口』における人口推定の方法は，「人口論草稿」と同じである。すなわち古代の諸文献に依拠し，ハリーの法則とテンプルマンを利用して古代諸国民の人口を算出していくのである。また，ヒュームが，ゼロがひとつ多いと批判したアテネの奴隷の数，40万人もそのままである。古代諸国民の人口の推計結果は「人口論草稿」と若

43　このように述べながらウォーレスはリンネルや羊毛，小物や道具類等を奢侈品とみなしている。*DN*, p. 23.ウォーレスの奢侈概念については永井義雄『イギリス急進主義の研究』，前掲，42-4頁をみよ。

44　「生活資料は，ものごとの性質上，便益品や奢侈品に優先するものであるから，前者を手にいれる産業は，後者に役立つ産業にたいして，必然的に優先するにちがいない。したがって生活資料を提供する農村の耕作と改良は，必然的に，便益と奢侈の手段だけを供給する町の拡大に優先するにちがいない。」Smith, *op. cit.*, vol. 1, p. 377. 邦訳第2巻，184-5頁。

干異なるところもあるが[45]，古代の優位という結論はゆるぎないものであった。ヒュームが近代の優位を確認するためにみたドーヴァーあるいはカレーを中心とする半径200マイル以内の地域とかなりかさなるガリアについても古代の優位が主張される。ローマに征服される以前のガリアは実に広大で「そこにはフランス全土だけでなくネザーランドの大部分さらにスイスの一部が含まれていた。しかもガリアの人口は，現在の同じ地域――そこにヨーロッパで最も人口稠密ないくつかのところさらにホラント州までも含まれているのであるが――と同じほど多かった，否，それ以上であったと思われる。」（*DN*, 68）すでに指摘したように[46]ヒュームは，古代ガリアの生活様式はその北方の近隣諸民族よりも遅れていたとみていた。しかしウォーレスによれば，カエサルが最初に侵略した頃のガリアはゲルマンや北方諸民族と同じように野蛮な状態ではなかった。彼等はより文明化されていたのである[47]。ベルギウムの人口推計は，「人口論草稿」とほぼ同じ800万人であり，ガリア全体の人口は，その面積がベルギウムのほぼ4倍であることから，800万の4倍として約3200万人と推定されている[48]。ヒュームによればガリアの人口は800万人，同地域の現在の人口の約3分の1であった[49]。

『古代と近代の人口』におけるブリテンの現状に対する評価は，ジャコバイトの乱の直前に報告された「人口論草稿」よりもはるかに高くなる。近年の政策により「いくつかの国において大きな改善がみられる。わがブリテン島は，とりわけ幸運であった。ブリテンは，ギリシャとローマが繁栄していた頃に苦しめられていたあの古代の粗野で野蛮な状態から徐々に頭をもたげてきた。卑小で軽蔑すべき存在であったブリテンが…平和の館，自由の府となっているのをみてカエサルやアグリコラは如何ほど驚くであろうか。農業に熱を入れ，技術が栄え，商業によって富んでいる，なんと幸せな島であろうか。」（*DN*, 79）

45　ギリシャの人口は「人口論草稿」では1000万人と推定されていたが，『古代と近代の人口』では1400万人となる。Cf. *DN*, p. 56.

46　前出，314頁をみよ。

47　*DN*, pp. 68-70.

48　*Ibid.*, p. 73.

49　前出，314頁をみよ。

だがウォーレスによれば「ブリテンですら，また，現在最も文明化されている国々といえども，古代に最もよく耕されていたあの地域の人口には近づけないのである。」（*DN*, 79）

近代における人口衰退の原因としては，『古代と近代の人口』でも自然的原因より社会的原因が重視されている。以下のような社会的原因が列挙される。①宗教的道徳的制度の相違②従者と貧民に関する慣習の相違③財産相続制度の相違④結婚への刺激が近代には少ないこと⑤ヨーロッパの常備軍には多くの独身者がいること⑥遠隔地との貿易⑦農業の軽視⑧統治の大きさの相違⑨大君主国とくにローマ帝国による諸国家の征服⑩古代の質素の喪失。①から⑧までは「人口論草稿」でも挙げられていたもので，加筆・修正はあるが基本的にはほぼ同じ内容である。大きな修正としてはフレッチャーのブリテン分割論を，人口には有利としつつも，分割が，名誉革命体制を脅かすという理由で拒否した点である。「そのような想像上の国家構造から引き出されるかもしれない利益のために我々が現在享受している自由，平和，平穏を危険にさらすのは非常に軽率なことだと思われる。」（*DN*, 106）大きな加筆は⑦にみられ，そこでウォーレスは，共和制時代の古代ギリシャ・ローマにおける農業の重視と質素な生活様式に注目する[50]。

『古代と近代の人口』で新たに追加された⑨⑩は，人口衰退の原因というよりも，人口論からみたウォーレスの古代社会史であり，内容的には⑦⑧の展開である。まず⑨で大洪水後の，ノアの子孫達の増殖過程が展開される。はじめは小さな社会を形成し，急速に人口が増加する。それとともに彼等はアジアの豊穣な土地から周辺のヨーロッパ，アフリカへと移住していく。東方で小さな国家が滅ぼされ，アッシリア，バビロニア，メディア，ペルシャに大帝国が形成されたころヨーロッパは，多くの小国にわかれていて，人口は急速に増大しつつあった。しかしやがてヨーロッパも東方と同じ運命をたどることになる。小国は滅ぼされ，ローマ帝国が成立する。特定の時期を確定することは困難であるが，この間のある時期，ヨーロッパの人口は，後のいかなる時代よりもは

---

[50] *DN*, pp. 98-104.

るかに多かったという[51]。しかし，第一次ポエニ戦争の頃からヨーロッパ，アジア，アフリカの多くの国々が，ローマの侵略により衰退していくことになる。その後ゴート族やその他の野蛮未開民族によって征服され「古代にはよく耕されていた世界の西方地域は非常に衰退し，古代の力と栄光を取り戻すことは出来なかったのである。」(*DN*, 111)

⑩では古代の大きな人口を支えた質素な生活と豊富で安価な食料，それを産み出した古代の農業について詳述される。ここでもウォーレスは，古代の人口推計の場合と同じように，古典のなかで挙げられている数字を典拠とする。さらに物価については，古典以外に近代のアーバスノット[52]も利用される。これらからウォーレスが導き出したのは，古代ギリシャ，ローマでは，奢侈が増大しはじめた頃にも，まだ，質素な生活が残り，農業が重視され，食料品が安価で，その為に現在よりも容易に家族を扶養できたということである。「世界中で原初の質素な生活の大部分は長いあいだ存続していた。そして奢侈が増大し，身分の高い人びとが非常に贅沢になってからも，古代の趣味が勤勉をともない，そしてそれは主として直接農業の改良にむけられ，非常に多くの生活必需品を産出した。質素と倹約だけでは人口稠密な大国を作ることはできない。人類は勤勉でなければならない。また，彼等の勤勉は適切な方向にむけられなければならない。こうして食料の供給に向けられていた古代の勤勉が，驚くほどの豊かさをもたらした。そして以上のことから我々は古代の多くの国々における人口の優位を説明できるのである。」(*DN*, 146-7) 古代の質素と倹約，および農業に向けられた勤勉の所産としての豊富な食料が，古代諸国民の大きな人口を支えていたのである。

以上のように古代における人口の優位と近代における人口減の社会的原因を考察したウォーレスは，「人口論草稿」と同様に『古代と近代の人口』末尾でも改善策を展開する。その内容は，「人口論草稿」で展開されていたものとほぼ同じである。すなわち富裕層が子供を農業に向くように教育すること，および，

---

[51] *Ibid.*, p. 109. Cf. *ibid.*, p. 147.ここでは人口が多かった時期として「アレクサンドロス大王の頃とローマ帝国が世界を奴隷化する以前」という。

[52] C. Arbuthnot, *Table of ancient coins, weights and measures*, London, 1724.

死後の妻子の生活を保障するための基金を設立することを提案する。しかし重要な追加がある。怠惰な貧民対策として製造業の導入を提案するのだ。「我々の先祖には知られなかったような勤勉の精神が育ちつつあるが，我々のあいだには依然として多くの怠惰な人々が存在しているので，いくつかの村に非常に有益な製造業が樹立され，あらゆる階層の富裕な人々によって支えられるとすれば，農業を大いに奨励し，土地の価値と改良に大きく貢献することになるであろう。製造業者は，土地の生産物にたいする市場を提供することによって農業を奨励することになるであろうし，農夫は，製造業者の製品を購入することによって製造業を奨励することになるであろう。こうして双方の努力が結合し，土地は豊かになり，その国の人口が多くなり，そして社会は繁栄することになるのである。」（*DN*, 153）このような製造業の奨励は，先に見た一般的原理に反しないか。そのことを意識してウォーレスは次のような注をつけている。「わたくしは先に述べた考えを忘れてしまっていると思われるかもしれない。製造業の種類があまりにも多すぎるのは有害であるというのがわたくしの意見であるが，いくつかの製造業は常に必要なものとして認められなければならない。」（*DN*, 153）さらに古代の趣味が復活することは期待しえないので，それほど必要でない仕事であっても，人々がまったく怠惰でいるよりも，その仕事に従事しているほうがよいとつづける。

また『古代と近代の人口』の改善策には，とくにハイランド対象の提案が付け加えられている[53]。「最上の国王を廃位させ，最高の政府を転覆させ，そしてブリテンの自由を台無しにしようとする荒野の粗野な住民によって引き起こされた」（*DN*, 155）ジャコバイトの乱後，優れた法律によってスコットランドに自由が確保され，製造業が推進されるようになってきた。しかしハイランドは依然として野蛮で怠惰な状態にある。そこでウォーレスはまず，ハイランドの地勢は，耕作に向いていないので，土地は牧畜向けに改良すべきだという。そうすることにより多くの牛を飼育することができる。次に住民を文明化するには，彼等を勤勉にしなければならない。そのために農業と異なる産業，とく

---

[53] 永井義雄『イギリス急進主義の研究』前掲，9頁以下参照。

に漁業を振興すべきだという。「彼等は，彼等の漁獲物を輸出することによって富を獲得することができるであろう。富を獲得することによって勤勉になるであろう。勤勉になることによって文明化されるであろう。」（*DN*, 157-8）さらにウォーレスは，人びとを勤勉にするために，彼等の模範となるような「勤勉な商人や製造業者」をハイランドに送り込み，その「荒涼とした岩だらけの地域に勤勉な人びとからなるいくつかの村を創設」（*DN*, 158）することを提案する。

こうして『古代と近代の人口』の末尾で提案された改善策のなかには「人口論草稿」にはなかった製造業振興計画がみられるようになった。農業から製造業へ視点が移行しつつある。しかしウォーレスが，ヒュームが見たような富裕で文明化した社会を構想していたとは思われない。先の提案への注のなかでも製造業が多すぎることは有害だといわれていた。さらに『古代と近代の人口』の「結論」としてウォーレスは，「倹約，節制，質素，少しのことで満足すること，労働の習慣といった謙虚な徳」（*DN*, 159）が人間に幸福・自由・独立をもたらし，そしてこうした徳を涵養することにより地上は人口稠密になり，社会は繁栄するというのだ。さらに「こうした徳がすたれ，堕落した贅沢な趣味が広がりはじめたことが，現代における人口の減少の大きな誘因となった」（*DN*, 160）というのだ。私的悪徳が全体の利益にいたるというマンダヴィルの主張が厳しく批判される。マンダヴィル批判は「附録」におけるヒューム批判へと展開していく。「附録」におけるウォーレスのヒューム批判の検討は今後の課題としたい。